

支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭

守 屋 憲 治

千歳市史編集委員会専門部員

支笏湖畔モラップに活火山樽前と風不死を眼前に望むキャンプ場がある。キャンプ場は支笏湖東岸唯一の砂浜で、都会の喧騒を忘れ時を過ごすことができる。このキャンプ場を見下ろすのがモラップ山で、山裾の自転車・歩行者専用道路となっている旧・国道276号の坂を八〇〇メートル程行くと両側の緩斜地に樹高一八メートル前後の針葉樹の人工林が広がり、北側の森には二五〇メートルほどのエゾシカの食害防止ネットが張り巡らされている。

この針葉樹林は昭和三十六年五月に昭和天皇、香淳皇后（本文中・天皇皇后両陛下）をお迎えして開催された第一二回植樹行事並びに国土緑化大会（当時通称・植樹祭／S45改称・全国植樹祭）で植樹されたアカエゾマツである。

第一二回植樹祭とお手入れの第一一回全国育樹祭（S62）、苦小牧静川で開催された第五八回全国植樹祭（H19）、これら三つの行事を核に周辺の出来事をまとめてみたい。

モラップ山

植樹祭の舞台となったモラップの概要は次のとおりである。

支笏湖畔のモラップは二つの小山からなっている（mo-ra-p 小さな・低い・もの（山））。支笏湖温泉に近い方がキムンモラップ（478メートル・山手のモラップ）、苦小牧側をピスンモラップ（506・4メートル・浜手のモラップ）通称モラップ山／浜海岸と呼び、四万二〇〇〇年前の支笏

火山の大噴火で支笏湖が出現する以前から存在した古い山だという。ピスンモラップの北斜面を利用した国設モーラップ山スキー場が昭和三十八年から平成六年まで中モラップにあった。また、二つのモラップ山の間をモラップウツルといいカルデラの際に北海道百年を記念した千歳市青年の家支笏湖青少年研修センター（S44～H17）と労働省所管の支笏湖勤労青少年フレンドシップセンター（S49～H15）が並んで建っていた。

モラップへの道について考察したい。モラップウツルの中モラップまでの道路が完成したのは昭和十年のことである。翌年には千歳自動車合資会社が創られバスが運行された。このバス会社が北海道鉄道に譲られ千歳川右岸の湖畔（現・休暇村付近）に到達したのは十二年のことである。

支笏国道と呼ばれる一般国道276号の前身は、昭和二十五年八月に開通した苦小牧市道支笏湖産業道路の苦小牧営林署丸山事業所廠舎から分岐する林道として二十八年八月に開通、苦小牧市営バスがモーラップ線を開業し湖畔から船でしか行けなかったキャンパーを野営場に運んだ。モラップから先、美笛までの支笏湖南岸林道が札幌営林局の手によって開通するのは三十五年のことである（S40～道道、S45～国道）。

モラップは砂浜が広がるキャンプ地として戦前から知られ、昭和十三年には日独青年交換会が行われた。戦後の二十四年に道営モーラップキャンプ場として開設、三十三年に千歳市に移管されている（H6休暇村委託、H9環境庁移管）。この間、三十一年には後のモーラップキャンプまつりとなる「湖畔の夕べ」が苦小牧観光協会によって始められた（H元統合↓支笏湖湖水まつり）。

執筆者註 「モーラップ」とは千歳市の字名「モラップ」の通称であり本稿ではモラップを原則とするが、一部引用部分と固有名詞などにおいて併記する。

植樹祭前年の動向

支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭が、どのように決定したかについては不詳である。しかし、山形県上山市蔵王山麓大森山において昭和三十五年五月十日に開催された第一回植樹祭視察のため、市の神藤為五郎助役と議会産業経済常任委員会の委員長と委員が出張している。

この視察は千歳における行事を計画する上からも多くの参考に資する点が多かったといい、市ではどのように対策を立てるかなどにつき産業経済常任委員会とともに資料に基づいて検討を重ねていったという。

植樹祭は緑の羽根募金運動や学校林運動を推進し国土緑化運動の高揚を図る国土緑化推進委員会（現・国土緑化推進機構）と都道府県の主催であるが、国土緑化推進委員会を所管する農林省の外局である林野庁、そして天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぐことから宮内庁とも密接な関係にあった。

蔵王山麓大森山で植樹祭が開催されたころ、すでに翌年は支笏湖畔モラップ山麓での開催と両陛下のご来道は五月二十五日とされていた。ご来道を前提に北海道林務部は宮内庁と日程を折衝するための試案を練った。試案は三泊四日から五泊六日までの三案があり、宮内庁の下検分を待つて三十五年中に計画の概要がまとまる手はずになっていた。

いずれの案も、一日目は千歳に到着後直ちに支笏湖畔の王子製紙苦小牧工場倶楽部別邸（別邸）に向かわれご宿泊、翌日は植樹祭ご臨席と別邸に後泊となっていた。

「支笏湖畔モラップ山ろく（支笏湖畔モラップ山麓）」とは千歳市と苫小牧市にまたがる場所を示したもので北海道林務部『第十二回植樹行事並びに国土緑化大会実施概要書（植樹行事実施概要書）』にある植樹行事の開催場所であった。当時、『広報ちとせ』では「支笏湖畔モラップ」とし、新聞紙上でも多くが同様だった（一部紙上「支笏湖畔」）。

十一月十八日付『北海道新聞』に植樹祭の計画概要が決まったと報道された。

十七日計画の概要がまとまった。それによると両陛下の日程は宮中行事との関連から明春五月二十三日羽田発特別機でご来道、四泊五日の日程で道内を視察される見通しが濃くなったため、両陛下のご出席する植樹行事は五月二十四日支笏湖畔モラップで行い、翌二十五日は農林省林業試験場道支場でトドマツのおてまきをしていただく計画である。

なお来道日程変更にもなう視察個所は当初の第二案を若干修正されるもようである。①植樹行事②おてまき、など実施概要はつぎのとおり。

①植樹行事（引用者要約）支笏湖畔モラップ山ろくで国土緑化大会、ひきつづいて植樹行事。苫小牧国有林苫小牧事業区三二四林班と千二林班の九・二、参集予定者一万二千人（中央招待千人、道内招待九千人、招待者以外の参集者千人、大会奉仕者千人）、一人三本の割でアカエゾマツ合計三万六千本を植える。函館、稚内、北見、網走、根室各駅発、千歳、苫小牧駅着の『緑の列車』4本特発、バス二百台、ハイヤー百五十台を準備する。宿舎は千歳、苫小牧は大会役員の宿舎にあて、招待者は登別（中央招待者千人）と札幌（道内招待者千五百人）に分宿する。

記事にあるご来道日程第二案とは次のようなものであった（八月十日付『北海道新聞』掲載）。

五月二十五日、千歳着、直ちに支笏湖畔王子苫小牧荘別邸に行かれ、お泊まり。二十六日、支笏湖での植樹祭ご臨席、同別邸お泊まり。二十七日、札幌市豊平の農林省林業試験場道支場では（播）種、道庁、北大クラーク記念館、北大植物園、道立札幌養老園（または道立中央乳児院）ご視察、定山溪拓銀栖霞荘か知事公館にお泊まり。二十八日、道立美唄職業訓練所、栗山町の王子畜種研究所ご視察のあと、登別グランドホテルに二泊。二十九日苫小牧港、岩倉組ホモン工場

ご視察ののちご退道。(四泊五日)(ルビィ引用者)

十八日付の新聞記事にあるように、宮中行事との関係から日程が二日繰り上がったが、視察先は最終的なものではなかった。

執筆者註 昭和三十六年第一二回植樹祭が支笏湖畔モラップ山麓に決定した経過については資料が乏しく判然としない。しかし、平成十九年第五八回の苦小牧東部地域・つた森山林隣接地における植樹祭開催申請が十五年で決定が十六年八月だったこと、昭和六十二年第十一回育樹祭の決定が五十九年八月だったことを考え合わせると、第一二回の植樹祭も昭和三十二年頃から開催協議などの動きがあったと思われる(『第十一回全国育樹祭記念誌』、『第58回全国植樹祭開催概要パンフレット』参考)

台風15号と植樹予定地

昭和四十四年発行『千歳市史』、五十八年発行『増補千歳市史』いずれにも植樹祭についての記述があるが、なぜ支笏湖畔モラップ山麓が会場に選ばれたかについては触れられていない。少し考察してみたい。

北海道林務部『植樹行事実施概要書』に大会の趣旨を見ると

(略) 北海道においては、昭和29年15号台風により、森林は有史以来の災害を受けて、林力は急減したため、荒廃林地における災害が頻発し、さらに、木材供給力の低下によって、経済発展を阻害する結果を招くに至り、ここに拡大造林を中心として、林力増強の推進を痛感する次第となった。

とあり、森林生産力は低位生産の天然林から人工林に旺盛な意欲と技術によって転換することが肝要であるとしている。このことから北海道における植樹祭の目的は、台風15号からの復興が主な目的であったと理解することができる(林野庁ホームページ「全国植樹祭」(参考)「全国植樹祭開催一覧」第二二回テーマ「積雪寒冷地帯の拡大造林と屋敷林の造林」)。

昭和二十九年九月二十六日に来襲した台風15号は、いわゆる風台風で水の被害はほとんどなかった。台風は北海道に接近したころピークを迎えた。最大瞬間風速は積丹の神威岬灯台で観測した六三・二メートル、道内各地での風速は三〇メートル以上となった。岩内では市街地の八割にあたる三〇〇〇戸余りが焼失、青函鉄道連絡船五隻が沈没し一四三〇人が死亡・行方不明となった。また、支笏湖周辺のやせた火山灰地では根を張れない全山の太木が根こそぎ倒された。土ごとめくりあがった一〇メートル以上もある太木の根の深さはわずかに三〇〜四〇センチしかなかった。台風15号の被害が大きくなった理由として、この年の五月暴風に痛めつけられた森林が再び強烈な風速と緩慢な進行速度によって襲われたことにあった。

これが台風15号の概観であり、水上勉の小説『飢餓海峡』が生まれる題材となった。四年後の昭和三十三年、気象庁は被害の大きさに鑑み、最も多くの死者・行方不明者一一五五人を出した鉄道連絡船の名から「洞爺丸台風」と命名した。

札幌管営林局が編集した『風害8000万石・北海道森林風害記録写真集』には「林業面においては生産諸施設の機能の麻痺とともに、被害面積48万ha、被害材積8千万石に及び有史未曾有の惨害を招来し、特に大雪山を中心とする石狩川その他重要水源地帯の原生林、樽前山麓火山灰地帯の森林を始めとし、道内有数森林地区を一朝にして倒壊し、風倒、挫折墨壘として荒涼たる姿に変じた」とあり、空中写真はマッチの軸を机の上にはばらまいたような状態を写した。樽前山麓の被害は口無沼周辺が最もひどく、厚平内、樽前国道沿い、支寒内、幌美内と広範囲で四五〇〇〜一〇〇〇畝、蓄積量では三七〇万石に及んだという。風倒木処理のため設定された林道、作業道が今も迷路のように縦横に走る。また、支寒内の風倒木は陸路が未整備のため玉切つて素材丸太にし、湖岸で筏に組み動力船で千歳川口に曳い

た。北ガス文化ホールの位置にあつた恵庭営林署千歳伐採事業所千歳貯木場の引込線では長物車で風倒木輸送の臨時貨物が組成され、千歳や苫小牧は風倒木景気に沸いたという。(執筆者註 1石(材積) ≡ 0・278立方尺)

風倒木の処理は昭和三十二年に完了、復旧造林が三十五年まで続けられた。伐採事務所や造材飯場、蹄鉄小屋、鍛冶小屋などが立ち並んだ口無沼のほとりに沙流川石に刻まれた樹魂碑がある。筆者は口無沼を訪れるたびに、苫小牧営林署長金田一による背面の碑文が切なくも美しいと感じる。

口無沼事業所跡

十五号台風で倒れし木々よ

タルマイ山麓に再び美林が育成されん

風倒木整理の中心基地なりしこの地に

一九六五年五月二十四日植樹行事の日

その霊を偲び建之

(表紙裏・樹魂碑写真参照)

植樹祭会場選定について考えてみたい。

候補地の選定に当たって先ず台風15号の被災地であること。道内各地からの参加の利便を考え植樹会場近くまで鉄道の利用が可能なこと。招待者を宿泊させるため周辺に宿泊施設の確保が可能であることも要素となったであろう。また、両陛下、中央招待者が空路到着する千歳飛行場から遠隔でないことも旅程などから重要な要素だったに違いない。さらに行幸啓の御泊所、警備が困難でないことを勘案して第一二回植樹祭会場が支笏湖畔モラップ山麓となつたと考えられる。

モラップ部分林 植栽予定地は千歳市営モラップキャンプ場の北東、ピスンモラップ南西山麓に位置する国有林苫小牧事業区314(現・1314)林班の一部七・八八〇一杉と1002(現・6002)林班の

植樹祭会場見取図

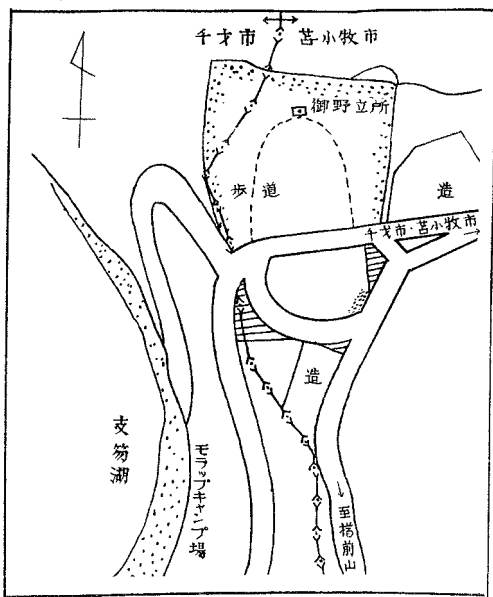


図1 植樹祭会場見取図(『行幸啓概要(図面関係)』を一部修正)
 行政界は林班界による 千歳市域が1002林班、苫小牧市域は314林班となる
 「造」は復旧造林済地を表している

一部一・三一五四畝、合わせて九・一九五五畝の広さだった。予定地は台風15号被災地で湖面から五〇畝ほど(海拔三〇〇畝前後)の緩やかな傾斜地となつていて、中央部を丸山とモラップを結ぶ林道が横断する。予定地西端からは湖へ急坂となり、東端からは八ヶ岳の樽前登山道が延びる。

この地を北海道主催の植樹祭会場とするため、昭和三十五年九月一日に愛林緑化思想昂揚記念部分林として札幌営林局(現・北海道森林管理局)と部分林の設定契約をなした。部分林とは分収林と同意で、国有林野に国以外のものが造林、その収益を国と造林者で分収する森林を指すもので、モラップ部分林と呼ばれている。伐期は七五年とされたが、記念林としての存置も検討するとした。

台風15号被災地の復旧造林は昭和三十五年までに終わったことは前述した。植樹祭会場となる予定地は第一二回植樹祭のために復旧造林作業から除外された地であつたことが推察できる。

九月十一日から植樹祭会場の整備が始まった。『植樹行事実施概要書』

では「地拵及整地 地拵は全刈焼払とし、当日会場に充当する部分は地上の抜根、倒朽木を除去し、特に入念な整地を行う」とされた。

モラップ周辺の造林についてみる。

支笏湖周辺の北海道官林は皇室財産の安定確立のため明治二十三年九月に御料局御料林に編入された。三十七年には植樹祭会場となる314林班右隣の315林班に御料局札幌支庁苦小牧出張所(後・苦小牧営林署)初の造林が行われたことで知られる。このことから314林班も最も古い時代の造林地と考えられる。当時、苗圃はまだなく山間から丁寧に採取されたクロエゾマツ(Ⅱエゾマツ)の山引苗やまびきなえを天然更新を補助するようなかたちで補植(造林)したという。丸山に苗畑ができたのは大正十三年のことであった(同年、御料局改組↓帝室林野局)。昭和二十二年四月、宮内省の廃止によって御料林は農林省所管の国有林となり現在に至る。

丸山は昭和十九年に苦小牧の字名となった。それ以前は山線の駅名から十三哩マイル(山線苦小牧からの距離)と呼ばれていた。国有林苦小牧事業区314林班の所在地も丸山である。なお、丸山は山火事監視望楼・丸山遠見が建っているお茶碗を伏せたような三二七の山の名からきている。

アカエゾマツ 植樹祭で用いられた苗木はアカエゾマツであったが、樹種はどのように決まっていたのだろうか。

『森林復興の軌跡』「IV樽前山麓の風害跡地復旧」に当時、苦小牧営林署長だった金田一へのインタビュー(H6・10)に答えがあった。『森林復興の軌跡』は洞爺丸台風から四〇年を記念して編集された。

— (略) アカエゾマツですがこれはあらかじめ植栽樹種として決まっていたわけですか。

【金田一】アカエゾマツがあらかじめ植栽樹種として決まっていたわけではありません。トドマツについては、開芽時期と植樹祭の日が重なりました。アカエ

ゾマツは、トドマツより開芽時期が遅いということで植栽樹種として採用したわけです。また、幸い、丸山苗畑にアカエゾマツの養苗がありました。

北海道の厳しい気象条件は造林の隘路となっていて、開芽時期は晩霜害と密接な関係があった。水井憲雄は『光珠内季報』で林木の霜害について次のように述べている。

(略)トドマツの場合、マイナス5℃、2時間に耐えるのが開芽10日以前であり、マイナス10℃、8時間で頂芽の凍死が始まるのは40日前である。もし開芽の時期が5月中旬と考えるなら、その40日前は4月上旬となり、その頃は造林地においてマイナス10℃となることは十分に考えられ、その頃から被害をうける可能性がある。またアカエゾマツはマイナス5℃、2時間で開芽8日前から頂芽の凍死が始まるが、開芽時期そのものが遅いのであまり霜害をうけない。しかし、低下する温度によって、やはり限界があるので、極度の低温にさらされると被害をうける(S13・6・18北大苦小牧演習林晩霜大被害)。

今までも高海拔地帯に植栽されたアカエゾマツに大きな被害がでた例がある。(原文では「マイナス」は「一」と表記)

植樹祭では霜害を考慮し、苦小牧営林署丸山造林事業所苗畑産五年生二回床替のアカエゾマツ苗木が使われた。なお、アカエゾマツはクロエゾマツとともにエゾマツと総称され、昭和四十一年に「北海道の木」に選定されている。

支笏湖畔の準備

道道支笏湖公園線 昭和十年に千歳市街から中モラップまでの自動車道が出来上がったことは述べた(十二年に現・休暇村周辺まで延長、二十一年に現・翠明橋の位置に人道橋架橋、二十三年には自動車通行が可能となる)。この道路は村道千歳支笏湖街道と呼ばれ、十三年九月二十八日地

方費道（＝県道）49号千歳支笏湖線に昇格、二十九年三月三十日道道となる。

千歳飛行場に到着された両陛下は、千歳から支笏湖畔の別邸に向かうには道道支笏湖公園線を通行するのが至近であるが、当時の道道は昭和三十四年から舗装工事に着手したばかりで、大部分は火山灰からなる黄塵万丈のそろばん道路で御料車が通行するには難があった。道道苦小牧支笏湖線の丸山から植樹祭会場に至る林道についても同様の状態で、一度に多数の車を通すことは視界不良となつて事故が起きても不思議ではないと関係者はさじを投げた。

このため往路は、北海道中央バス東烏柵舞停留所から烏柵舞林道に入り藤の沢の恵庭営林署藤の沢事業所廠舎・苗畑を経由して丸山に至る北五条林道、南七条林道を使い、苦小牧営林署丸山事業所から道道苦小牧支笏湖線に出て湖畔に向かうこととした（当時、藤の沢には水明小中学校藤の沢分校、渡部木材藤の沢事業所があった）。また、復路は道道支笏湖公園線に十分なるホコリ止めを行つたうえ通行することとし、王子製紙のバルプ廃液の散布も考えられた。植樹祭行事本番にあつて往路の林道一七^キは札幌営林局が、復路の道道二八^キには北海道土木現業所がそれぞれ補修のうえ通行三日前から塩化カルシウムがホコリ止めとして散布された。なお、道道支笏湖公園線全線の舗装は昭和四十一年八月のことであつた。

倶楽部別邸の移築 王子製紙苦小牧工場の操業記念日となつてゐる明治四十四年九月十二日に皇太子殿下（後・大正天皇）が工場を視察した。この時の迎賓施設が倶楽部であつた。当時、苦小牧を訪れた皇族、高官は支笏湖を訪れるのが常であつたが湖畔には迎賓のための施設はなかつた。

昭和七年に閑院宮殿下のご来道が予定され、その御泊所として支笏湖畔に建設されたのが総檜造りの倶楽部別邸（別邸）で五年に完成した。

支笏湖畔では昭和二十七年に集団施設地区が計画され、二十九年（or S 32）には地区が指定された。結果、別邸は商店街区域の湖側となり静かさを保ちづらい面がでてきた。このため、支笏湖畔モラップ山麓で開催される植樹祭のため両陛下がご来道されるのを機会にチリセツナイ川の右岸、ふ化場支笏湖事業所上手の高台に移築することとした。

昭和三十五年八月から敷地の整地に取りかかり、その年の内に移築と約一六〇平方^メの離れ座敷を増築し別邸は一〇〇〇平方^メほどの広さとなつた。増築部分は本道産のトドマツ、アカマツの板壁で山荘風の優美な建物であり、イタヤカエデ、クリ、ナラの林に囲まれていた（旧別邸・表紙地図では山線鉄橋右に苦小牧荘と表示。現状、あずまや四阿のある中央広場）。

また、昭和三十年に支笏湖小学校の旧校舎を改修して日本ユースホステル協会初の専属施設となつた支笏湖ユースホステル（ユース）が、三十五年七月に全面改築し田上義也設計による赤い三角屋根の国内初の直営ユースとして竣工した。さらにユースの前には二十九年建設の千歳交通支笏湖営業所があつたが、三十五年に中央バスが駐車場を新設し現在の広さとなるなど植樹祭の開催は支笏湖畔を大きく変えた。

第二回植樹祭

行幸啓日程（天皇皇后両陛下下行幸啓御日程）参考／時刻＝千歳関係分のみ

二十三日 皇居御出門 10・45 羽田空港発 11・25

千歳飛行場着 12・55 別邸着 13・50

二十四日 別邸発 11・10 植栽地着 11・30 御野立所着 11・36

天皇陛下植樹 11・38 皇后陛下植樹 11・43

参会者一同植樹 11・48～12・20

御野立所発 12・25 植栽地発 12・30 別邸着 12・50

二十五日 別邸発9・10 林業試験場北海道支場（御播種） 札幌神社（現・北海

道神宮） 北海道体育祭（円山陸上競技場） 御泊所・札幌グランドホ

テル（皇后陛下・日赤道支社社員大会）

二十六日 北海道庁 北海道大学クラーク会館／植物園 御召列車C57149

〔築〕札幌駅発↓栗山駅・王子製紙林木育種研究所（旧・森林博物館）

↓登別駅着 御泊所・登別グランドホテル

二十七日 苫小牧市立ひまわり保育所（旧・苫小牧授産場付属保育所） 苫小牧工

業港（建設中・S38第一船入港） 苫小牧市役所

千歳飛行場発13・50

羽田空港着15・20 皇居御還幸啓16・00

行幸啓下検分 昭和三十六年四月一日午後、北海道警察の御道筋警衛実地調査が行われ、支笏湖に一泊し別邸を視察後、苫小牧に向かった。

十日からは四日間の日程で下検分が実施され、宮内庁からは侍従のほか総務課長、事務官など五人に、皇宮警察、警察庁、国鉄本社、林野庁を加え総勢一二人が来道した。千歳市内では飛行場のほか、植栽地、別邸が下検分箇所とされた。下検分は道庁、道警、市町村関係者を含め総勢五〇人前後となった。

御召機ジェットDC・8 植樹祭当時、千歳飛行場着発旅客機は全てプロペラ機で降乗は空自千歳基地山形格納庫の横にあった民航待合室前で行われていた。先ず、千歳着発旅客機のジェット化を振り返ってみよう。

全日本空輸は昭和三十四年十月のレシプロ機コンベア440メトロポリタンに続き、翌年八月にはジェットエンジンでプロペラを回すターボプロップのビッカーズバイカウント744を札幌（千歳）便に就航させた。日本航空のダグラスDC・4、6Bでは速度、与圧、静粛性などの快適性で全日空機に対抗できず劣勢を強いられ、日航はすぐに国際線からDC・

7Cセブンシーズ（レシプロ）を転用した。三十六年七月、全日空はバイカウント828（ターボプロップ）でさらに攻勢をかけた。日航は全日空のターボプロップ攻勢に対する最後の切り札として、東南アジア線用に発注したコンベア880ジェットアローを国内線初のジェットとして千歳便に就航させたのは植樹祭から四カ月後の九月のことだった。

千歳飛行場ジェット就航に先立ち、植樹祭の御召機には日航ジェット旅客機DC・8・33・JA8005 MIYAMA（宮島）が充てられた。操縦は旧・日航創立時にノースウエストからウエットリースされた機体にパイサーとして乗組んだベテラン江島三郎だった。（宮島）は日航DC・8一番機FUJI（富士／S35・7登録）とともに昭和三十年に第一発注された四機の四番機として、三十五年十一月に登録されたばかりの新鋭機だった。三十六年四月十九日には重量がDC・7の倍もある大型のDC・8が千歳飛行場において安全に着発できるかの試験飛行が実施された。当時の滑走路は現在の西側一本だけで耐荷重も低いものだった（この時点で東側滑走路はDC・7対応のため十二月の供用に向け造成中、西側の大型機対応のためのオーバーレイ補修は三十九年のことである）。

このようことから（宮島）は千歳飛行場初のジェット旅客機だった蓋然性が高い。なお、復路御召機も江島機長操縦の（宮島）が充てられた。

なお、DC・8の千歳便への就航は昭和四十五年四月のことである。ちなみに同年、日航のロゴマークである鶴丸を垂直尾翼に描いた初の機体はSHIKOTSU（支笏／DC・8・55JA8016・S41就航）で、文化二（1805）年シコツに鶴が多く生息することに因み「シコツに鶴」「鶴は千年」「千歳」と命名された地名の由来にも重なり一興である。

市民の歓迎と堵列 両陛下の奉迎は飛行場から御泊所と植栽地のある支笏湖畔に向かわれる五月二十三日（奉迎御道筋Ⅱ駐機場・現・第一通用門

・現・平和官舎敷内・正門・本町五丁目・錦町十字街・大和町）、支笏湖畔から御播種のため札幌市豊平の林業試験場北海道支場に向かわれる二十五日（大和町・錦町十字街・北信濃）、苫小牧から還幸啓のため飛行場に向かわれる二十七日（朝日町八丁目・本町五丁目）と三回実施された。奉迎はほかに蘭越小学校前、湖畔支所前（現・駐在所横）から別邸入口、水明郷第一発電所前などにおいても行われた。一般市民の奉迎は御料車進行方向右側の沿道を原則とした。御料車は溜色とらいしと呼ばれたあざき色の一九三〇年代前期型タイムラー・ベント製メルセデス・ベント770Kで、ボンネットに天皇旗、ラジエターグリル前方などに菊花御紋章をつけていた。



写真1 北栄小学校児童の奉迎(昭和36年5月25日撮影)
国道36号学田の坂における奉迎の様子 校舎は昭和29年建築で自校式給食設備を有するモデル校だった

四月十八日起案の「植樹行事の事務遂行計画(案)について」では日の丸の小旗三万枚準備とある。当時の千歳市の人口は約四万五〇〇〇人、小旗の枚数からも多くの市民が奉迎に参加したことがわかる。また、五月二日には市内小中高各学
校長宛に奉迎協力文を発送した。奉迎に参加したのは、
二十三日千歳小（5月末在籍者数1210）、千歳中（1239）、千歳高校（全日制837）の三校、二十五日が緑小（707）と北栄小（1347）、二十七日が末広小（756）と青葉中（795）となっていた。日の丸の小旗は郊外の小中学校に

も全校児童生徒数分が配布された。新聞報道によると二十三日の奉迎者は二万人余に及んだという。

蘭越小学校前にはアイヌの人たち一〇〇人ほどと校長に引率された全校児童一〇余人が車列を待っていた。車列の通過とともに児童たちは一カ月前から練習したというハーモニカで「さくらさくら」を一生懸命に演奏、御料車は徐行し両陛下はにこやかに手を振り児童に応えたという。

堵列とれつとは、栄誉礼に該当する身分を有する人物の送迎、及び敬意を表するため大勢の人が垣（＝堵）のように横に並んで整列するの意で、植樹祭行幸啓時には陸空自衛隊在千歳部隊などによって実施された。

資料によると二十三日は米軍管理の千歳飛行場正門では米陸軍第一二野戦通信部隊（ASACHIOSE）と空自千歳基地所在部隊の合同儀仗隊が、春日町から大和町間には陸自東部隊二五〇〇人、二十五日は北栄町から北部隊正門通りに北部隊二〇〇〇人が、二十七日には朝日町八丁目からママチ橋（グリーンベルト）間に東部隊二五〇〇人が堵列したという。また、陸自は通信支援として御道筋の連絡体制のため要所に無線機を配置したほか、沿道の秩序維持に市役所などとともに当たった。

植樹行事 五月二十三日、道内参会者のうち稚内・深川、網走・滝川、函館・長万部、根室・富良野間各駅発の国鉄団体専用臨時列車（団臨）「緑の列車」を利用できる人は列車で、後志、日高など団臨を利用できない人は札幌、苫小牧に前泊し会場を目指した。二十四日朝、稚内と網走からの団臨は千歳に、ほかは苫小牧に着いた。最も遠隔な根室からは二〇時間の長旅となった。参会者は団臨からバスに乗り換えてモラップに向かった。

千歳着の二本の団臨は、約一九〇〇人を乗せて午前七時三十分前後に着した。参会者を運ぶ札幌市営バス、中央バス、国鉄バスの貸切車四二台



写真2 植樹祭会場(昭和36年5月24日撮影)
参会者が植樹を終え、両陛下が御野立所を發たれる直前の様子
七稜星の北海道旗制定は昭和42年である

別邸を午前十一時十分に出発した御料車の車列は分岐点を経由せずに、苫小牧市道(現・モーラップ1号線)を通り宮林局林道(現・支笏国道)に入った。樽前登山道路(15号台風風倒木処理↓林道昇格、S32拡幅↓苫小牧市営バス運行、S41丸山・五合目↓道道樽前錦岡停車場線、H6↓道道樽前錦岡線)入口付近の乗用車駐車場外側に新設された半円形の車道

は、駅前ロータリーに収まらず第2停車場線(現・中央大通)の千歳川寄りに待機した。参会者を乗せたバスは七〇分をかけた午前九時頃までにキャンプ場入口の会場駐車場に到着した。一部、湖畔に到着したバスの乗客は支笏湖観光運輸の遊覧船八隻でモーラップにピストン輸送された。

モーラップは、曇りがちながらも薄日が射していたが次第に雲が立ち込めて五月末とは思われぬほどに空気は冷たく、植樹会場から仰ぎ見る樽前、風不死の沢筋にはまだ雪が残っていた。

千歳市は会場に案内所、湯茶接待所を設け女子職員が接待に当たった。駐車場では陸自北部隊員が整理を担った。

午前十時三十分から始まった国土緑化大会は予定どおり十一時二十分に終わった。

を通り、林道から御野立所おのたてしよに通じる逆U字型の両陛下用歩道モーラップ側に十一時三十分に着された(御野立所は天皇の野外休憩所)。

両陛下は町村金吾北海道知事の先導で二〇〇〇〇程を歩き、会場北端の御野立所に到着された。御野立所では机に置いた天皇陛下下の帽子が一瞬の強風にあおられ飛んでしまったというエピソードが残る。

陸自音楽隊伴奏による君が代の斉唱とともにボーイスカウトによって御野立所後方の国旗掲揚塔に日の丸が揚がった。両陛下は清瀬一郎国土緑化推進委員会委員長(衆議院議長、東京裁判東条英機元首相主任弁護士)と道知事の介添えで三本のアカエゾマツの苗木を「森」の字の形で植栽、続いて参会者一万二〇〇〇人も両陛下が見守るなか同様に三本の苗木を植栽した。このなかには千歳からの一二五人も含まれた。

参会者が植栽を終えると寒さに震えながら白いブラウス姿の女子学生二〇〇人ほどと学生服姿の男子学生一〇〇人ほどが、「朝のひかりはるかなる海を照らし」と『北海道讃歌』を合唱、参会者の万歳のなか両陛下は十二時三十分会場を後にされた。

別邸に戻られた両陛下はご昼食の後、国土緑化大会で表彰された林業功労者を激励された。午後二時半からは、千歳から別邸に向かう御料車に同乗した館脇北大教授(植物園長)の案内で水明郷の原始林へ散策に出られた。天皇陛下は生物学研究者としてのひと時を過ごされ、皇后陛下は山中に咲き乱れるシラネアオイやミヤマエンレイソウなどのスケッチを楽しまれた。

御製 斧入らぬ林をゆきて驚きぬしらねあふいは群れ咲きにほふ

灯籠流し 植樹祭日程における地元行事として支笏湖自治振興会(S33設立)では、別邸にご宿泊される両陛下の旅情をお慰めしようと灯籠流しを計画、千歳市と千歳観光協会がタイアップした。支笏湖における灯籠流し

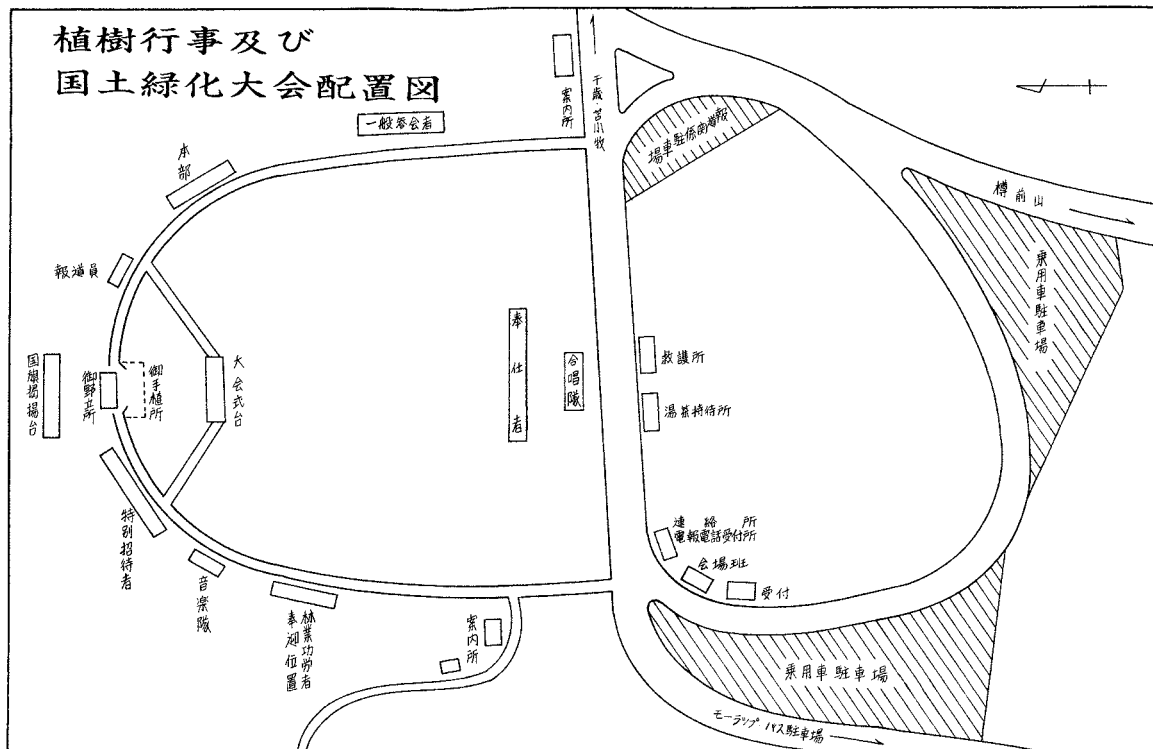


図2 植樹行事及び国土緑化大会配置図 (『行幸啓概要(図面関係)』)
歩道モラップ側案内所の位置に写真3の植樹記念碑が建っている

しは例年七月第一日曜に開催されていた支笏湖湖水まつり(S26)に棧橋から五〇〇個の灯籠を放流する形で催されていた。

地元行事実施に当たり、自治振興会員と王子製紙千歳川発電所の協力を得て新たに五〇〇個ほどの灯籠を作った。灯籠は二〇センチ四方、厚さ一センチほどの雑板にジュースの空き缶を取り付けた簡単なものだったが、重油と灯油を混ぜて燃料とし一時間ほど灯るようになっていた。

当初は二十三日に行くこととしていたが波が高く二十四日となった。夕刻の雨が上がったのを見計らって始まった灯籠流しは、別邸の沖で支笏湖観光運輸の遊覧船みどり丸(元・菱中通船部所属/鋼船・27ト・85人乗)から次々と放たれ、湖面に幻想的な風景が映し出された。

午後八時過ぎ、電燈が消された別邸の離れの広縁には、灯籠流しをご覧になる両陛下を囲むように四、五人のシルエツトが浮かんだという。

灯籠流しは翠明閣に宿泊した供奉員のほか多くの観光客も楽しんだ。

翌日、陛下から侍従を介して「灯籠は糸で繋いでいるのか」とお尋ねがあったという。また、両陛下が別邸滞在中に第一樽前丸で湖上遊覧される計画もあったが天候が悪く中止となった。

御製 湖をわたりくる風はさむけれどかへでの若葉うつくしき宿

すずらん献上 天皇陛下をはじめとする皇室に北国の初夏の便りを届ける千歳市のすずらん献上は、半世紀以上の長きに亘っている。その始まりは支笏湖畔モラップ山麓の植樹祭にあった。

すずらんの献上は、植樹祭でご来道された天皇陛下がすずらんをご覧になりお気に召されたことが発端だとされるが定かではない。しかし、植樹祭が開催された昭和三十六年の五月二十四日前後には、千歳地方ではすずらん狩りが始まっていた。千歳周辺では演習場のほか、支笏湖周辺の国有

林でも野生種のすずらんが自生することから天皇陛下が皇后陛下とともに水明郷の森でご覧になった可能性は十分にある。

すずらん献上初出の『千歳毎日新聞』を見てみたい。

スズランとカラー 千歳市 近く献上手続き

千歳市では、近く両陛下下行幸啓に対する献上品としてスズランのハチ植えと支笏湖風景のカラー写真集を差し上げることを決めた。同献上品は、米田市長が近く上京して宮内庁に献上、御礼言上する時持参する…(略)(S36・5・25付)

供奉員にもスズラン きょうお召機に積む

(略) 宮内庁と総理府の供奉員五十人の労をねぎらい、スズランのハチ植えをお土産に贈った(略) 五十個のスズランは、お召機の荷物室に積まれた(S36・5・27付)

『千歳毎日新聞』は、献上の事実を淡々と記事にしているばかりで、すずらんを選定した理由は見当たらない。この年の満開は六月三日頃ですずらん狩りは十一日頃まで楽しめたという。

献上すずらは初めのころは野生のものだったが、すぐに市内の農家が温室栽培したドイツスズランに代わった。ドイツスズランは観賞用で日本野生種に較べると大型で香りも強いとされる。日本野生種は近年の林地開発などで生息域が減少しているといわれる。

現在、皇室への献上先は天皇后陛下(宮内庁)、皇太子同妃両殿下(東宮御所)、秋篠宮家、常陸宮家で、すずらの輸送には当初からANAの協力を得ている。また、全国の自治体で皇室に花を献上しているのは千歳市だけだという。

平成二十六年のすずらん献上を『北海道新聞』は次のように伝えた。

千歳産のスズラン今年も皇室献上へ

【千歳】市は19日、千歳産のスズランを皇室に献上するセレモニーを新千歳空

港で行った。山口幸太郎市長が上京し、20日に宮内庁の担当者へ手渡す。スズランの献上は、1961年に昭和天皇が支笏湖畔で植樹を行ったことを機会に始まり、今年が54回目。(略)(H26・5・20付)

二十日のすずらん献上に対して翌日、今上陛下のお礼のお言葉が宮内庁から千歳市に伝えられた。

育樹祭までの植栽地

植樹行事記念碑 植樹祭に際して天皇陛下は「ひとくくとあかえそ松のなへうゑてみと里のもりになれといのり津」と詠まれた。

植樹祭一年後の昭和三十七年五月二十四日・北海道緑の日、小雨交じりのなか御野立所跡に通じる植栽地内歩道モラップ側入口の左方で町村知事、米田市長らが出席して御製を刻んだ植樹行事記念碑(植樹祭記念碑)が神式に則り除幕された。



写真3 植樹祭記念碑除幕式(昭和37年5月24日撮影)
小雨交じりの中、神式に則って除幕式が挙行された。周囲は現在、うっそうとした森になっている

植樹祭記念碑は、コンクリートに鉄平石を張り付けた基壇の上にコンクリート三段の台座、その上に御影石の上台と碑本体が載るといふ六段重ねで二層五十センチほどの高さがある。碑本体は高さが一層ほどの四角錐台で正面に御製、背面には建立の趣意が陰刻されている。

昭和三十六年五月二十四日/天皇皇后陛下のご臨席を/あおぎ山水清秀のこの地に於て/第十二回植樹行

事が行われ／アカエゾマツ三万六千本を植栽／したよってここに碑を建て／永くこれを記念する

昭和三十七年五月二十四日／北海道知事 町村金吾

平成十八年にコンクリート台座三段が一段に成形され、台座正面右に真鍮の御製解説板が付けられた（「人々とあかえぞ松の苗うえて緑の森になれ」といのりつ）。

成育の遅れ 『北海道新聞』は昭和三十九年に特集記事「緑は泣いている」を連載した。シリーズ一回目の八月八日付紙面では「植えっぱなしは困る 両陛下のマツも生育遅れる」と、緑の羽根と緑化思想の普及に絡め植栽地の現状を酷評した。

（略）それから三年余。今この記念すべき地でのアカエゾマツの成育ぶりは、お義理にもよいとはいえない。（略）植樹祭向けに地ならししたものが、そのとき腐植土の下にあった火山灰が表面に出てきたため、せっかく植えた木の根つきが悪く、根づいても肥料分の不足からひ弱に育った。しかも湖畔から吹き上げる寒風は幼木を痛め、一年たった三十七年春には三分の一以上が枯れていた、という。（その後、徹底した補植、施肥、冬はワラツトによる防寒で何とか生き延びたがかなり遅れている。お手植えの松は金網で囲われているため順調だが、ほかは一年から二年の遅れが出ている。一畝にはなっているところ四〇から七〇程ぐらい）本道の“緑化運動”の聖地というには、いかにも“お粗末”な感じだ。

（一）内筆者要約）
アカエゾマツは開芽時期が遅く耐寒性があるということで植栽樹種として選定されたが、当初は保育が悪く三分の一が枯れた。また、植栽地は自然環境が思いのほか厳しかったことがよくわかる事象である。

北海道百年 昭和四十三年は、明治二年に蝦夷地を北海道と改め、開拓使をおいて開拓に着手してからちょうど百年となった。

北海道百年という意義深い時にあたって、北海道では次の時代に誇りうる開拓記念館（H27改称↓北海道博物館）、野幌森林公園の造成、百年記念塔の建設、赤れんが庁舎の復元、『新北海道史』の編纂などの記念事業を実施した。千歳においても記念祝典ご臨席のため来道された両陛下がお手植えの松をご視察、植栽地が百年記念の美林に選定されたほか、地方記念施設として支笏湖青少年研修センターが建設された。

・植栽地・北海道の美林に選定

『北海道の名木美林』美林の部（北海道林務部編集）

モーラップ記念林（愛緑化思想昂揚記念部分林）…一部略

●所在地⇨苫小牧市丸山 千才市モーラップ●樹種⇨アカエゾマツ●現状⇨樹高⇨158cm、当年伸長⇨39cm、本数⇨34、697本、林令⇨7年

記録⇨昭和36年5月24日、第12回国土緑化大会植樹行事が天皇后両陛下御臨席のもとに、道内外招待者および奉仕者9、983名の参加を得て、支笏湖畔モーラップにおいて実施された。／同地は国有林で、道は部分林契約を締結し、苫小牧林務署が植栽木の管理撫育を行っている。／湖面を見おろし、樽前、フツプシ、恵庭岳を望む風光明媚な地のなかで、活着、生長ともに良好な生育をなし、若々しい美林となっている。●昭和36年〜43年 毎年撫育作業を行い現在にいたる（下刈年2〜3回、アブラムシ駆除、施肥など）

当該書には名木が一〇〇と三〇カ所の美林のほか、一九カ所の並木などが選定されているが、幼木はモーラップ記念林だけである。植樹祭の実施が北海道林政史においていかに大きな事業だったかが推し量れる。

・植栽地・両陛下ご視察 八月三十一日、北海道百年記念祝典ご臨席のため両陛下は御召機日航DC-8-55（BANDAI（磐梯））で午後二時十五分、植樹祭以来七年ぶりに北海道の地を踏まれた。市街地沿道の日の丸の波と陸自隊員の楮列のなか御料車ロールス・ロイス・ファントムV

1961年型は、昭和四十一年に全線舗装になった道道支笏湖公園線へと進み三時過ぎ支笏湖畔の御泊所である別邸に着いた。

この日、支笏湖の天候は厚い雲に覆われていたが、両陛下ご到着のころには樽前山、恵庭岳も山容を望めるまでに回復していた。拝謁、道政奏上を受けられたのち両陛下は午後四時、植樹会場の支笏湖畔モラップ山麓に向かわれた。御料車は苫小牧市道を経由して昭和四十年に道道洞爺湖支笏湖線に昇格した元の林道に入ったが未だ舗装はされていなかった。

両陛下は町村知事の案内で、樹高が二〇五〇センチほどに生育されたお手植えの松をご覧になられた。天皇陛下は周囲の草木を身をかがめて観察されるなど、生物学研究者としての学究と植物に対する愛情のほどがうかがわれたという。四時三十五分には別邸に戻られた。

・御召列車の運行 九月一日、夜来の雨も昼前には小降りとなり天皇陛下は晴れ間をみて別邸の庭を散策、皇后陛下は湖畔の風景をスケッチされるなどして過ごされた。

両陛下は翌日の北海道百年記念祝典にご臨席のためは午後二時三十分、千歳駅一番線（駅舎側）発のディーゼル機関車牽引の御召列車で札幌に向かわれ三時二十六分に到着された（着々札幌駅舎側一番線）。DD51初の御召機となった548号機（旭）は前面に国旗を交差、菊花御紋章をつけ、客車は供奉車、随従車など四両の中間に御料車1号を組む1号編成だった。当時、難所が少ない道央、道南では未だDD51は運用されていなかった。

一日、二日の御泊所は札幌パークホテルだった。

二日午前に道庁とサッポロビール工場をご視察、午後には北海道神宮をご参拝後、円山陸上競技場で開催された百年記念祝典にご臨場された。

その後、両陛下は道北をDE10重連の御召列車で移動、地方視察され

た。三日、御召列車は旭川へ、五日は上川から豊富に到着された。六日には稚内から天北線を経由、旭川を経て札幌に戻られた。

最終日となる七日は、羊が丘の農林省北海道農業試験場でファイトロロン（人工気象室）をご視察、午後零時千歳空港発の日航機でご退道された。この間、稚内公園では樺太同胞の霊を慰められた。また、御召列車ご乗車中は発着駅と滝川、名寄、音威子府、幌延の各駅で特別奉送迎者のご送迎を受けられた。なお、御召機DD51548号機は現在、三笠鉄道記念館クワフォード公園（旧・三笠駅）に静態保存されている。

・天皇家のご視察 ・皇太子殿下（現・今上陛下） 昭和四十九年八月四日から六日までの間、殿下は陸自北海道大演習場東千歳地区内の千歳原で開催された第6回日本ジャンボリーご臨席と千歳地方のご視察を兼ね別邸に滞在された。

八月四日午前十一時三十五分に日航機で千歳に到着された殿下は千歳市工場団地のサントリー千歳プラント（現・日本アスパラ）と北海道松下電器（現・パナソニック）をご視察後、午後三時五十分には御料車で支笏湖畔モラップ山麓に向かわれた。

植樹記念碑をご視察後、お手植えの松について道林務部長と札幌営林局長の説明を受けられた。アカエゾマツは三〇五〇センチほどに生育していた。午後五時過ぎ、別邸に到着された（詳細『志古津』第20号参照）。

・浩宮殿下（現・皇太子） 昭和五十四年八月三日午後四時半、殿下は日航機で千歳に到着された。ご来道の目的は、四日に真駒内公園屋内競技場（現・真駒内セキスイハイムアイスアリーナ）で開催される第四回世界剣道選手権大会開会式と、五日に洞爺少年自然の家で開催される第一〇回北海道スポーツ少年大会開会式に出席されるためであった。

五日には札幌から洞爺村（現・洞爺湖町）に向かわれる途次、支笏湖畔

モラップ山麓に立ち寄られ両陛下お手植えの松と植樹祭記念碑をご覧になられた。六日の午後四時過ぎには宮沢教育長の説明で美々貝塚をご見学後、空港に向かわれた。

・ 礼宮殿下（現・秋篠宮） 昭和五十六年八月六日、両陛下お手植えの松と植樹祭記念碑をご視察された。

第一回全国育樹祭

全国育樹祭は、天皇皇后両陛下が植樹祭においてお手植えの木々の枝打ちなどのお手入れを皇太子同妃両陛下が行い、森林資源の保護と緑化運動の推進を目的に昭和五十二年から始まった。

支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭を受けた第一回全国育樹祭は、植樹祭から数えて二六年後の昭和六十二年九月十三、十四日に開催された。植栽地は間伐の適期を迎えていた。開催テーマは道民から広く募集し「植えた夢 つないで育てて森づくり」とされた。

育樹祭開催のあゆみ

『第十一回全国育樹祭記念誌』参考

58年10月 林野庁及び国土緑化推進委員会（林野・緑推）に第11回全国育樹祭本道

開催協議

59年3月 緑推に育樹祭本道開催申請

8月 緑推理事会・育樹祭本道開催決定

60年5月 道林務部内に育樹祭連絡会議設置

7月 林野・緑推に開催計画等協議①（②60・12③61・1④62・5）

10月 林野現地調査

61年6月 緑推事前調査

7月 宮内庁、林野・緑推と行啓日程・開催計画等協議①（②61・12③62・3

④62・7）

11月 大会テーマ「植えた夢 つないで育てて森づくり」決定

62年5月 実行委総会開催

6月 宮内庁事前調査

7月 宮内庁へ行啓御執り成し書提出

8月 お手入れ行事及び式典リハーサル実施

9月13日 第11回全国育樹祭お手入れ行事開催（支笏湖モラップ）

14日 第11回全国育樹祭開催（野幌森林公園／参加者七〇〇〇人（うち中

央・道外二〇〇人）

お手入れ行事 皇太子同妃両陛下は育樹祭と北海道地方事情御視察のため、九月十三日午後零時十五分空港着の全日空機で来道された。

両陛下はホテル日航千歳（現・グランテラス千歳）で昼食を終えられたのち、御料車日産プレジデントで支笏湖畔モラップ山麓に午後二時三十分過ぎに到着された。

後藤田正晴緑化推進連絡会議議長（内閣官房長官）、横路知事らの案内でお手入れの松に向かわれた。植栽地内御道筋となる歩道は簡易に舗装され、アカエゾマツは高さ九メートルほどに生育していた。

両陛下のお手入れは林業後継者の介添えで左右の枝を二本ずつ枝打ちされた。会場内では、千歳市桜木の特用林産物生産者久保田守ら林業後継者七人が梯子を使つての枝打ち実技を披露したほか、チェーンソーによる間伐作業、ハーベスタ（自走伐倒造材機）による立木伐倒、枝払い、玉切り、集材の一連作業をご覧になられた（説明役＝道林務部長）。その後、植樹祭記念碑をご覧になり、午後三時十分過ぎには小憩のため別邸に向かわれた。会場の参加者は百数十人ほどを数えた。

千歳川林東公園 別邸を午後四時近くに発たれた両陛下は御泊所京王プラザホテル札幌に向かわれる途次、千歳川に立ち寄られた。場所は支笏湖

公園自転車道が最も千歳川に接近する林東公園西側にある千歳川旧河道の内水循環水路の位置であった。

お立ち寄りの目的はこの年、花園の西越採卵場（現・千歳川捕獲場）捕魚車（ラインディアン水車）で捕えられたサケの一部を再放流し、蘭越のふ化場まで自然遡上させる試みが行われ、市街地川岸からサケが見られたからであった。魚類研究者として知られる皇太子殿下は妃殿下とともに偏光グラスを手に千歳川を遡上するサケの姿を楽しまれた。

十四日に野幌森林公園で行われた育樹祭式典では、千歳市東丘の若山長大が民有林振興の功績で北海道産業貢献賞（緑化功労）を受賞した。両殿下は式典ご臨場の後、千歳空港からエア・ニッポン日本航空機製造YS-11で中標津空港を経由して根室に入られた。

十五日は根室、別海、浜中、厚岸の地方事情をご視察後釧路へ、十六日には釧路各所をご視察されたのち、釧路空港から全日空ボーイング767でご退道された。

後日、千歳市本庁舎市民ホールにおいて両殿下がお手入れて使用された鞆付きで握りのある小型の鋸と白手袋が、道林務部によって展示された。

植栽地と行政界

本論ではここまで、道林務部がいう植栽場所を示した支笏湖畔モラップ山麓、もしくは国有林苫小牧事業区314林班（七・九杉）・1002林班（一・三杉）（面積は各林班の一部）と記してきた。これは、支笏湖周辺が国土地理院地形図（地形図）が表示する行政界と土地所有者である北海道管林局（現・北海道森林管理局）林班図が表示する林班界¹¹行政界との差異があり、地名による記述が難しいからであった（千歳市は地形図が一般的に入手しやすく広く定着していること、更新に際しては関係市町村に

境界を照会し係争がないものについて行政界を表示していることなどから地形図の行政界を主張している）。

植栽地の行政界を地形図で見るとほぼ全域が千歳市域となるが、林班図によれば1002林班部分のみが千歳市域となる。

現在は自転車・歩行者専用道路となっている旧・国道276号は、樽前登山道やキャンプ場への取付道路、急カーブ、急勾配が連続していたため、自然植生への影響を考慮し道道樽前錦岡線の一部を通って山側を迂回するルートとして平成元年十月三日に切替えられた。ルート変更にもなうエピソードが『一般国道276号支笏国道工事誌』にコラムとして掲載されている。

一般国道276号モラップ改良工事に伴い道路管理境界を設定することになったが、千歳市と苫小牧が主張する市町村界にずれが生じていた（国土地理院地形図の市町村界と苫小牧管林署管内管理図林班界にずれがあった）。両市が主張する境界の中間点をもって暫定的境界とした。

両市の主張が折り合わず暫定境界を設定した理由は明確ではない。植樹

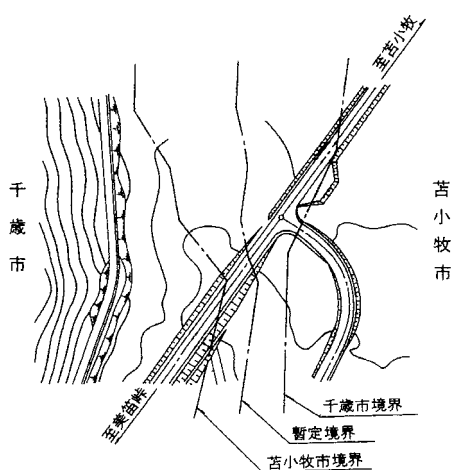


図3 管理境界平面図（『一般国道276号支笏国道工事誌』）
千歳市境界を上部に延長すると図1「植樹祭会場見取図」の右側歩道入口付近となり、苫小牧市境界を延長すると写真3の植樹祭記念碑がある分岐する道は道道樽前錦岡線

祭記念碑は314林班と1002林班の林班界(苦小牧市主張行政界)上に建立されていて暫定境界を設定しても碑の所在は千歳市域となっていた。いずれにしても植栽地が二市にまたがることから場を示した支笏湖畔モラップ山麓となったと考えられる。

植栽地をめぐる境界争いを概観した。そこで、植樹祭会場の地名について、どのように取り扱われてきたかを見てみたい(HP「ホームページ」)。

①道林務部『北海道の名木美林』『モラップ記念林』：苦小牧市丸山 千才市モラップ

②北海道『第十一次全国育樹祭記念誌』：北海道支笏湖モラップ(千歳市 苦小牧市)

③北海道『第58回全国植樹祭基本方針』：支笏湖畔(モラップ地区)

④第58回全国植樹祭天皇陛下お言葉：第58回「モラップ」苦小牧市、第12回「支笏湖畔」モラップ

⑤林野庁HP「全国植樹祭開催一覧」：北海道苦小牧市支笏湖畔

⑥林野庁HP「全国育樹祭開催一覧」：北海道苦小牧市道立自然公園

⑦北海道胆振総合振興局HP「モラップ部分林」

①と⑦は道の同一部の取扱いであるが、⑦に市名掲出はなく地域と植栽地の性格から「モラップ部分林」としている。正しい地名取扱いの①「苦小牧市丸山 千歳市モラップ」を加筆できないものか。

②「北海道支笏湖モラップ(千歳市 苦小牧市)」③「支笏湖畔(モラップ地区)」④「支笏湖畔のモラップ」は「支笏湖畔モラップ山麓」と同義と思考するが、支笏湖とモラップは千歳市の地名である。

⑤「支笏湖畔」は地域名と考えたいが苦小牧市域に支笏湖畔はなく、⑥「道立自然公園」は道が分収林契約と管理していることからの錯誤か。

いずれにしても、苦小牧市のみを開催地としているのは片手落ちである

う。

⑤と⑥一覧の他開催地においては二つの自治体にまたがる開催の場合、市区町村名を併記していることから、千歳市として開催地名の是正を求めてもよいのではないだろうか。

第五八回全国植樹祭

第五八回全国植樹祭の会場は、日高自動車道苦東中央IC付近の苦小牧市静川苦小牧東部地域内の雑木林「つた森山林」隣接地にある。海側は昭和五十七年に石油備蓄を開始した北海道石油共同備蓄基地となる。全国植樹祭が工業地域で開催されたのは苦小牧が初めてとなった。

また、この地は昭和十八年に戦時統合によって国鉄千歳線・富内線となる北海道鉄道線が苗穂・千歳・沼ノ端・上鶴川(豊城)・辺富内(富内)を結んでいたが、沼ノ端から下り二つ目の駅が蔦森山林そばのニナルカであった(戦時統合・ニナルカ↓静川(駅名改称)、沼ノ端・豊城間休止/現・国道235号/富内線↓S61廃線)。

この地において平成十九年六月二十四日、「明日へ 未来へ 北の大地の森づくり」をテーマに北海道で二回目となる第五八回全国植樹祭が天皇皇后両陛下をお迎えして開催された。参加者は一人、広葉樹を主体に二万本を植樹し五杉の新たな森を造った。この植樹祭の第二会場となったのが第一二回植樹祭植栽地のモラップ部分林である。

モラップ部分林との関連を中心に記述していきたい。

台風18号 平成十六年九月八日、支笏湖周辺は洞爺丸台風再来といわれる台風18号の被害を受けた。道道支笏湖公園線、国道453号・276号沿いではトドマツやエゾマツの大径木のほか、シラカバの並木をなぎ倒し道路を塞いだことで支笏湖温泉は八時間以上も孤立、午前九時過ぎから

は停電となり復旧は翌朝となった。札幌では最大瞬間風速が五〇㍎を超え、道庁前庭や大通り公園、中島公園の巨木のほか、北大のポプラ並木が半数近く根こそぎ倒された。

支笏湖周辺では国有林の一角にあたる二七〇〇㍎が被害を受け、モーラップ部分林のアカエゾマツも五カ所合わせて一㍎の被害を受けた。

森林資源の循環 森林資源の循環とは、森を「植えて、育てて、伐って木材として活用し、また植える」ということをさし、植樹祭のコンセプトのひとつにもなっている。

平成十六年八月、『千歳民報』の「夕刊時評」は、モーラップ部分林について「林野行政の弱体化から間伐、つる切りなどの手入れが行き届かず、豊かそうに見える緑のなかに枝が枯れていたり弱々しい木が多い。全国植樹祭を機に森づくりの機運と行動が広がればと強く願う」とした。

植えたままではなく「育てて伐って」の考えから、第五八回全国植樹祭の御野立所の建設用材はモーラップ部分林のアカエゾマツ間伐材とすることとなった。また、平成十六年台風18号で大量に発生した支笏湖周辺の人工林風倒木などは、式典参加者一万人が着座できるベンチ二七〇〇㍎に活用することとした。御野立所とベンチに間伐材と風倒木を積極的に利用することによって、森林資源の有効活用と大切さをアピールすることとなった。

全国植樹祭を「森林資源の循環」の面から考えると、多くの森林資源を原料とする王子製紙苫小牧工場、日本製紙北海道工場勇払事業所（元・国策パルプ）、王子ネピア苫小牧工場（旧・ホクシー）が操業する国内最大の紙パルプ産業都市である苫小牧の、自然豊かな苫小牧東部地域を植樹祭の会場としたことに意義を見出さなければならぬ。

モーラップ部分林記念植樹 モーラップ部分林の平成十六年台風18号被

災部分についての補植が全国植樹祭に先立つ五月二十日、「モーラップ全国植樹祭の森 四十七年目の記念植樹」として実施された。

モーラップ部分林をさらに美しい森にしたいと作業に当たったのは、千歳、苫小牧の地元ボランティアや次代を担う少年少女ら四〇〇人ほどでミズナラ、イタヤカエデ、アオダモなどの広葉樹約一七〇〇本を植栽した。ミズナラを植えた「家具の森」、アオダモの「バットの森」、イタヤカエデの「楽器の森」のほか樹種によって彫刻の森、暮らしの森、薬用の森の六区画に分かれていた。植栽された幼木には、平成十七年初冬に部分林内から山取りされた五年生前後のミズナラ、イタヤカエデ、アオダモなど約八〇〇本が含まれた。

第一二回植樹祭とその後の歴史を知るにつれ、モーラップ部分林のアカエゾマツがいと嬉しい。部分林のアカエゾマツはあと一五年ほどで伐期を迎えるが、北海道を代表する観光地にあることから皆伐分収ではなく植樹祭記念碑とともに公園化し、植樹祭記念の森として永く道民とともにあるよう継続して育林願いたい。部分林が荒廃した植樹祭記念碑と「植樹祭植栽跡地」の説明板だけとなつてはあまりにも口惜しい。

引用・参考文献

- 千歳市『植樹祭関係』保存文書三冊（含・行幸啓資料） 昭和三十六年／『千歳市史』昭和四十四年／『増補千歳市史』昭和五十八年／新千歳市史機関誌『志古津』各号
- 北海道林務部『第十二回植樹行事並びに国土緑化大会実施概要書』 昭和三十六年
- ／『北海道の名木美林』昭和四十三年
- 北海道『行幸啓概要（図面関係）』 昭和三十六年／『行幸啓御日程次第書（付・

モーラップ御植栽地散策分』 昭和四十三年／『第十一回全国育樹祭記念誌』 昭和六十二年

地蔵慶護『武四郎のタルマイ越え』 みやま書房 平成三年

苫小牧民報社「森と私たち」取材班『森と私たち』 平成十八年

札幌開発建設部札幌道路事務所『一般国道276号支笏国道工事誌』(社)北海道開発技術センター 平成三年

よみがえった森林記念事業実行委員会編集『森林復興の軌跡』 平成七年

水井憲雄『最近発生した林木の霜害について』『光珠内年報』昭和47年度No.15 林業試験場 昭和四十八年

林野庁札幌管営林局『風害8000万石・北海道森林風害記録写真集』札幌林野共済会 昭和三十二年

自然公園美化管理財団『支笏洞爺国立公園支笏湖』 昭和六十三年

竹馬敏廣『樽前山』苫小牧郷土文化研究会 昭和五十四年

苫小牧市『苫小牧市史 下巻』昭和五十一年

『林班図』苫小牧管営林署・胆振東部森林管理署

北海道新聞社『天皇皇后両陛下ご来道記念 植樹祭クラブ』 昭和三十六年

長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社 昭和五十一年

『千歳民報』／『北海道新聞』／『読売新聞』／『千歳毎日新聞』

協力

北海道胆振総合振興局森林室(苫小牧)

先田次雄(自然公園財団支笏湖支部)

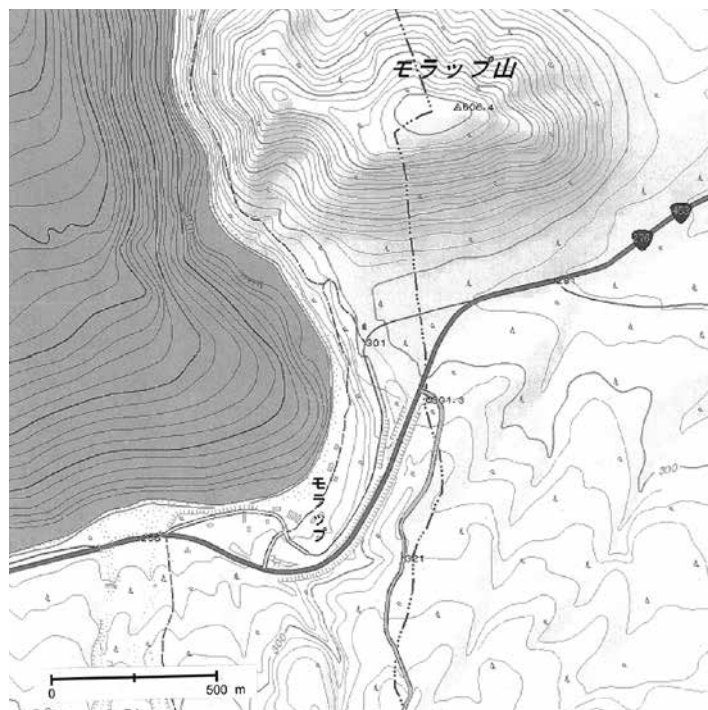


図4 『地理院地図(電子国土Web)』にみるモラップ部分林周辺
新旧の国道276号の位置関係がよく判る。旧道の急カーブ地点に植樹祭記念碑の地図記号があり、この上を林班図の行政区界が走る(図1参照)。ピスンモラップ山頂付近・モラップ部分林を抜け、道道樽前錦岡線に沿って走る線は地理院地図行政区界である